

印象記

岩野泡鳴

中村武羅夫

印象記

岩野泡鳴

一

岩野泡鳴は、樺太の蟹の罐詰事業に失敗して帰ってくと、東京にもおれなくて、暫く都落ちをしなければならなかった。一二年、大阪の近郊に逼塞して、小さな新聞に關係していたことは、彼れの作品に精しく書いてある。私が、泡鳴に初めて会ったのは、彼れが大阪から帰つて間もなく、ちようど遠藤清子と、西大久保の端の方に、小さな家を持ったすぐのことだった。清子は、当時の新

しい女で、泡鳴と同棲する前の年かに、情人と国府津の浜かどこかで心中しようとして、男だけは死んだが、清子の方は生き残ったのを、物好きな泡鳴は直接訪問して、自分と一緒になることを談判したのである。ところが当時、死んだ男のために髪など切って行い済ましていた清子は、同棲するのは関わないが、決して肉体だけはゆるさないと宣言した。泡鳴は、「ナニそんな馬鹿なことがあるもんか。同棲した以上、屹度おれが肉体を征服して見せる。」と揚言して、清子と一緒に暮すことになった。何事でも明けすけの泡鳴は、そんなこともだまってお

らず、すぐ吹聴するので、肉が勝つか霊が勝つかなどと、当時世間の好奇心を唆った事実である。私が、泡鳴に会ったのは、まだ、その勝負が、どっちともきまらないような時だった。

その時分、郊外にさらに建つ、新出来の安普請で、狭い家だった。家の中には、道具らしい道具とて一つもなく、七月時分の日のかんかん照った午前のことだったが、真赤な日射しががらんとした部屋一ぱいに射し込んで、部屋の中は、さながら釜の中のように暑かった。夜更しで朝の遅い泡鳴は、起き立てのような腫れぼったい顔を

して、手拭地の平袖の浴衣を腕まくりなんかして、部屋の真中にずかりと坐った。と、彼れにびったり身体をくっつけて並んで、中形浴衣に細帯の清子が、姐御か何かのように、片膝立てて坐った。そして一本の長煙管で、二人が一つの刳り抜きの煙草入れから、きざみ煙草を詰めては吹かすのである。私は、清子が泡鳴の手から長煙管を取ると、その雁首に刳り抜きの煙草入れを引っかけて、畳の上を自分の傍までずるずると引寄せると、すぱりすぱりと吹かした時の印象を、今でもはっきり覚えて居る。——二人の態度には、さすがの私も、すっかり驚

いてしまった。小女一人置かず、たった二人きりの住い
だった。

「君は、不都合じゃないか。」

泡鳴は、私が談話を聞きたいという用件を切り出すと、
行きなり居丈高いたけだかになってどなるのであった。

「それは話してもいいが、あんなことを書くなんて、実
に不都合だ。根も紫もない嘘を書くような雑誌に、話し
は出来ん。」

泡鳴の言葉尻に乗って、清子も、雑誌の不都合を滔々
と捲し立てるのだった。

何がそんな不都合なのかというのと、泡鳴と清子とが、寄席か何かからそろって出て来たのを見付けたお鳥が、（泡鳴は、樺太時代の女を、そういう名で作品に書いている。）啖呵を切ると、二人ともこそこそ隠れてしまっただというような噂を、私がそのまま「新潮」のゴシップに書いたのが、事実無根だというのである。お鳥にそんな権利はないし、自分たちの間柄は公明正大で、啖呵を切られて、こそこそと逃げかくれするような、そんな弱い尻はないというのである。あんなことを書かれては、二人が不見識極まると、二人ともかんかんかんに怒ってるの

である。二人の態度が余り高飛車なので、初めは私もむっとして、そんな噂があるから、噂を噂として載せたのが、何が悪いと抗弁して、二人を相手に議論したが、考えて見れば、私は泡鳴の談話を取りに行つたので、喧嘩する必要は、ちつともない。談話さえ取ればいいので、二人の怒りを、幾らかなだめにかかった。そして、結局、あんなことを一体誰が書いたかということになった時、私は、自分が書いたのではあるが、金子薫園氏が書いたのだと、泡鳴に嘘をついた。

「そうか薫園が書いたのか。そうだろう、歌人なんて気が小さい奴だから、人のことをすぐあんなことを書くんだ。実に怪しからん奴だ。」

そこで泡鳴と私と清子の三人は、口をそろえて、さんざんに金子薫園氏の悪口をいって、自然と泡鳴と清子の怒りも解け、彼れは、私のために長い談話をしてくれた。こんなことを聞けば、薫園氏は怒るかも知れない。だが、当時私は、どんなに死にもものぐるいになっても、一月に

百五十枚以上の談話を取らねばならい身の上だったし、薰園氏は、歌を詠んだり、書画を集めたりしていればいい身分だった。私が談話を取るために、薰園氏がこれくらいな冤罪をきてくれたって、そんなに怒ることはないだろうと、私は思っている。

そんなことが動機で、泡鳴と私とは、次第に親しくなつた。彼の最初の翻訳、シモンズの「象徴派の文学運動」なんか、出版するように話して見てくれといふので、新潮社から出すように話したり、国民中学会から「ブルタ―クの英雄伝」の翻訳を、泡鳴が引き受けたりしたのも、

その後のことである。盛んに小説を書いたり、文学評論を書くようになったのも、それからである。ちっとも物に拘泥しない、さつくりした気質の泡鳴は、詩の方ではちゃんと一家をなしていたし、「半獣主義」などの著述もあつたが、小説の方では、まだ無名作家なので、よく持ち込み原稿をした。印刷物のおおくなつた今では、少し人気のある作家だと、お高く留まつて、生意気なことをいって威張つてもおられるが、これが十二三年前だと、相当の作家でも、純粹に創作だけで生活して行くのは中々困難だった。一方で新聞雑誌の記者をするとか、翻

訳でもするか、教師でもするかした上に、持ち込み原稿もしなければならなかった。泡鳴だって誰だって、一時は皆そういう苦楚を嘗めて、そういう人々の艱難と努力とが下積みになって、漸く今日のような時代も迎えることが出来たのだ。

泡鳴、その実力と、時代のおかげとで、晩年は大へんによかったが、しかし、困窮な時代にも、ちつともへこたれない如く、全盛時代にも、生意気になったり、急に態度が変わったりするようなことはなかった。相変らず、ざっくばらんで、相変らず無雑作だった。

「君、きょうは、ウキスキイをご馳走しよう。」

泡鳴は、昼は大抵正午か二時ごろまで寝ていて、夜は朝方まで起きて仕事するのだったが、つかれてくると、興奮剤としてウキスキイをちびちびやるのだった。（彼れはわれわれがウキスキイというのを、決してそうはいわなかった。ウスキイというのである。また、普通ア―サー・シモンズというのを、アサ・シモンズというのである。誰かが、泡鳴流の呼び方をすれば、ポーが世界中で一番みじかい名だと冷やかしたことがあるが、彼れは長くひっ張るのは、間ちがっていると主張するのである。

だから、ポーも、泡鳴流にいえば、当然、「ポ」でなければならぬ。彼れは、時々ウキスキイだとか、自分の家で飼ってる生の蜂蜜とか、唐もろこしの焼いたのなぞ、御馳走してくれるのであった。愛嬌があつて、野蛮で、正直で、人を信じ易くて、実にいい人間だった。彼れが遠藤清子とわかれ、蒲原英枝氏と一緒になつて、大分世間を騒がした時、私は何かの用事で泡鳴を訪問して、英枝氏のことを「奥さん奥さん」といった。英枝氏を泡鳴との関係で、奥さんと呼んだのは、恐らく私が最初だったのだらう。彼れはひどくよろこんで、酒なぞ買わして、

御馳走してくれた。清子が山高帽が好きだといふので、山高帽ばかりかぶっていた泡鳴である。

「僕も、もうじき博士になる筈だ。」

泡鳴は、古い「新体詩作法」を少し訂正して、博士論文として提出し、今に博士号がくる筈だくる筈だといつては待っていた。とうとう博士号がこないうちに亡くなつてしまった。「新体詩作法」を書き直した彼れの博士論文は、今、何うなつたことであらうか？

日本文学電子図書館

文壇隨筆

著者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮社

大正14年11月10日 印刷

大正14年11月15日 発行

日本文学電子図書館